解　説

山本　薫

ここに訳出したのは、二〇一四年に刊行されたレバノン人女性作家ジャナー・ファウワーズ・アル＝ハサン（Janā Fawwāz al-Ḥassan）の長編小説『フロアー99』（Ṭābiq 99）の一部である。一九八五年生まれの著者は、新聞社で働くかたわら小説を執筆し、『私と彼女とそのほかの女たち』が二〇一三年にアラブ小説国際賞のショートリスト（最終候補六作品）に選出されたことで、一躍脚光を浴びた。アラブ小説国際賞は、イギリスのブッカー賞にならって二〇〇八年に創始され、「アラブのブッカー賞」として現在、アラブ世界で最も注目を集める文学賞であり、本作も今年、同賞のショートリスト入りを果たした。

『私と彼女とそのほかの女たち』は、伝統的な社会や家族のあり方に疎外感を覚える若い女性の心理を描いた小説で、地方のムスリム家庭出身で若くして結婚・離婚を経験した著者自身の経験が投影されていたのに対し、本作の主人公はパレスチナ難民二世の男性マジドと、彼の恋人で右派キリスト教徒の名家に生まれた女性ヒルダという、いずれも著者自身の出自からはかけ離れた人物像であるにもかかわらず、二人の心理や身体感覚が、痛々しいまでに微細に描き出される。さらに、物語の主な舞台であるニューヨーク中心部で主人公と交流を持つ様々な出自と過去を背負った登場人物たちの造形も見事であり、その一人一人の人生が読み手の心に深く迫ってくる。

本作のテーマは、一九七五年に始まり九〇年に終息した後もなおレバノン社会に暗い影を落とし続けている内戦の記憶が、若い世代の人生や人間関係にまでいかに大きく影響を及ぼしているかという、政治的にも思想的もきわめて困難かつ深い問いかけである。内戦の記憶は、小説に限らず、映画や演劇、美術など、内戦終結後のレバノンのアートシーンにおいて中心的なテーマの一つになってきた。だが、これほど真正面からこのテーマに取り組んだ作品が、しかも戦後世代である著者の手によって書かれたことには、驚きを禁じ得ない。本作はジャナー・ファウワーズ・アル＝ハサンにとって、前作から大きく飛躍し、作家としての揺るぎない一歩を踏み出した、記念すべき作品だといえるだろう。

主人公マジドは一九八二年にベイルートの難民キャンプで起きた虐殺事件で母を失い、父に連れられてアメリカに移住、マンハッタンの高層階に自社オフィスを構えるまでに成功するが、心身ともに虐殺の傷跡を抱え、生まれ育った難民キャンプとニューヨーク、さらには見知らぬ祖国パレスチナとのはざまで葛藤している。ニューヨークで彼と出会ったダンサー志望のヒルダは、虐殺事件を引き起こしたキリスト教右派の有力者の娘である自分に対し、マジドが越えがたい壁を感じていることに気づき、自分のルーツを見つめ直すためにレバノンに帰国してしまう。この小説は二人が遠く隔たった世界で、自分の過去と現在を見つめなおす過程を描いており、大きな動きはほとんどない。にもかかわらず、それぞれに過去の傷を引きずる友人たちや家族たちも含め、「人はどうやって過去と和解し、現在、そして未来に踏み出すことができるのか」という問いに登場人物たちがどんな答えを見出すのか、その心理と思考の流れに読者を引き込む力がこの作品の魅力である。

今回は主人公二人の心理的葛藤が高まる中盤の一部を訳出したが、小説の最後にヒルダとマジドがどんな決断を下すのか、別の機会にぜひ続きを訳出してみたい。最後に、部分訳を快諾してくださった著者ジャナー・ファウワーズ・アル＝ハサンに心から感謝する。